

♪♡ひととき コーナー♡♪

2007年12月14日(金)

「沙羅の樹文庫」から絵本・よみものなどを中心に
お借りして11月で102冊になりました。オーナー
西村さんの並々ならないご努力で立ち上がり、それ
を支える方たちが大勢居て、これまた大勢の大人や
子どもたちが集まってきて、本当によい空間が伊豆
高原に出現しました。15号になった「沙羅の樹文
庫だより」も、ひとつの集大成でしょうか。

お借りした中から、私なりに、むかし子どもだっ
た大人たちに是非お薦めしたい本(どれもなのです
が)を頑張って10冊チェックしてみました。

- ★二つの旅の終わりに(チェンバース作)
- ★サリーおばさんとの一週間(ホーヴァス作)
- ★時計を巻きにした少女(タイラー作)
- ★夜の訪問者(ブリーストリー作)
- ★ロザムンドおばさんの贈り物(ピルチャー作)
- ★弱きものの生き方 - 日本人再生の希望を掘る
(大塚初重×五木寛之ライブトーク)
- ★西の森の魔女が死んだ(梨木香歩作)
- ★こそあどの森シリーズ1~9(岡田淳作)
- ★アンジュルーある犬の物語(ヴァンサン作)
- ★ルリユールおじさん(いせひでこ作)

次は何を読もうかと、楽しそうに親子で棚に向か
っている姿に感動し、一冊一冊が吟味され選ばれて
いるからこそ、安心して<別世界>に入っていける
この文庫にくることが楽しみです。

2007年12月 クリスマスを前に
田畑木利子

おわけ(頒布 消費税抜きで)しています!

『おはなしのろうそく』(1~27)

『おはなしのろうそく愛蔵版』(1~7)

ベッドタイムストーリーに、子どもへの読み聞かせに
お薦めです。

♡♡文庫あれこれ♡♡

◆文庫の沙羅の樹が葉を落とし丸はだかです。冬になるとこの
あたりの景色も一変し、木々の葉に隠れていたものたちがくっ
きりとその所在をあらわして清々しい思いです。昨日来てみた
ら、お約束してくださったように、バラの木が植えられていま
した。そのそばに南天?でしょうか、赤い実の木まで。福岡さん
ありがとうございました。どんな花が咲くのでしょうか、これか
らが待ち遠しい。みなさんもお楽しみに! ◆一年を振り返り忙し
かったけれど、東京から毎月通ってたくさんの方に触れ、心あ
たたかな日々を過ごすことができました。できる範囲でまた、
新しい年もみなさんにくつろいでいただける文庫づくりを続け
たいと思います。中西さん、森川さん、稲本さん、高橋さん
をはじめ、たくさんの方を支えてくださる友の会の方々、そし
て利用して下さる会員のみなさんに感謝です。佳いお年を!
(西村)

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

- ◆新年1月は、19(土)、20(日)の両日です。
- ◆2月は16(土)、17(日)の両日です。
- ◆文庫の時間：土曜日は午後2時~5時、
日曜日は午前10時~午後3時
- ◆毎月開館日の日曜には、子どものための
小さなおはなし会があります。
午前10:30~11:00

◆文庫開館日は毎月、第3日曜とその前日の
土曜日の2日です(従って第3土曜日でな
く第2土曜日ということもあります)。

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》
みんなで勉強会

- ★毎月、文庫の前日の金曜日午後2:00から。
関心のある方は、お申し出ください。
★1月は休みます。

沙羅の樹文庫だより

No.16

(2007年12月号)



今年もあますところ、半月
伊豆の時間で暮らしているみなさんも年末に向けて
お忙しいことでしょう。

今日、東京から電車に乗って熱海を過ぎるころ、
空はどこまでも青く海は紺碧にかがやいていました。
水平線をながめながら、地球が丸いことを
改めて想いました。

Merry Christmas
&
A Happy New Year

来年もよろしくお祈りします。

紹介 子どもの本 おとなの本

ローワンと黄金の谷の謎

(エミリー・ロッダ作 さくまゆみこ訳 あすなろ書房)

私は、本を読むことが大好きです。本を読んでいるとその世界にひきこまれ、続きはどうなるのか自分でも考えながらページをめくっていきます。この本は、最初から何かが起きそうな雰囲気が始まります。家畜のバクシャーたちと暮らすリンの村の人々は、今は平和に暮らしていますが、ずっと昔、祖先は、ゼパックという国の奴隷として、今住む土地にやってきました。ゼパックに反乱を起こしたリンの祖先は、海に住むマリスの民や色々な土地を旅して暮らす<旅の人>と手を組んで戦い、ゼパックに勝ち、今の土地に住むようになりました。

物語では、今も仲が良い<旅の人>たちが1年ぶりに村に来るといふニュースが流れ、バクシャー係りの弱虫な少年ローワンの耳にも届きます。

村には嬉しく思わない人もいました。理由は、育てているイチゴをとられたくないから。このイチゴが、後になって大変な騒ぎを引き起こすとも知らずに……。

数日後、村人が次々に不思議な眠りに墜ち、起こそうとする数人も眠気に襲われ倒れていきます。たった二人残ったローワンと、パン屋の息子で半分<旅の人>の血を引くアランは、原因を探し村を去った<旅の人>を追います。

村は救われるのか、<旅の人>と関係はあるのか、そして村を襲ったものは……。

この本は2巻なので、ほかの巻も読んでみて下さい。

(重田 千洗)

※上の本は、<リンの谷のローワン>シリーズの2巻目で、このシリーズは、5巻出ています。

◆ちひろちゃんの家族はみんな読書家。本を読んだ思い出を自作の絵本にして何冊も持っています。『子どもと読書』07年5.6月号「子どもと読むこの1冊」に掲載されました◆

新刊・新入庫の本

子どもの本

絵本

『おはよう』『おやすみ』(なかがわりえこ作 やまわきゆりこ絵 グランママ社 1986)『きゅうりととまとさんとたまごさん』(松谷みよ子文 ひらやまえいぞう絵 童心社)『こぐまちゃんおはよう』(わかやまけん作 こぐま社)『ようこそわたしのへやへ』(ヘレナ・ダールベック作 シャルロット・ラメル絵 木坂涼訳 フレーベル館)『チリとチリリ まちのおはなし』『チリとチリリ うみのおはなし』(といかや作 アリス館)リクエスト本『ワイルドスミスのABC』『七羽のカラス』『おかねもちとくつやさん』(ブライアン・ワイルドスミス絵 らくだ出版)寄贈本『いるいるだあれ』(岩合日出子作 岩合光昭写真 福音館書店 2007)『おやすみおやすみぐっすりおやすみ』(マリサビーナ・ルッソ作 みらいなな訳 童話屋 2007)『かもさんおとおり』(マックロスキー文・絵 渡辺茂男訳 福音館書店)『あかいハリネズミ』(ジェイドナビ・ジン文・絵 深川明日美訳 リトルモア 2007)『だむのおじさんたち』(加古里子 ブッキング 2007)復刊本

読みもの

『くまのパティントン』(ポンド作 フォートナム絵 松岡享子訳 福音館書店)『火ようびのごちそうはひきかえる』(ひきかえるとんだ大冒険シリーズ1) (ラッセル・エリクソン作 佐藤涼子訳 評論社)『お皿のポタン』(高樓方子作 偕成社 2007)『ねずみ女房』(ゴッデン作 石井桃子訳 福音館書店)『サンタが空から落ちてきた』(コルネーリア・フンケ作 浅見昇吾訳 WAVE出版 2007)『アントン-命の重さ』(エリザベート・ツェラー作 中村智子訳 主婦の友社 2007)『さよなら僕の夏』(レイ・ブラッドベリ作 北山克彦訳 晶文社 2007)『凧九郎①』(吉橋通夫作 講談社)

お話の本

『子どもに語るアンデルセンのお話2』(松岡享子編 こぐま社 2007)『いちばんたいせつなもの-バルカンの昔話』(八百板洋子編訳 福音館書店 2007)

おとなの本

読み物

『藤たしアナベル・リイ総毛立ちつ身まかりつ』(大江健三郎著 新潮社 2007)

永遠の美少女、アナベル・リイへの想い。そして30年を経て甦る1本の映画への夢。女優と男たちの、生涯最後の冒険が始まる。ポオの美しい詩篇、枕草子、農民蜂起の伝承が破天荒なドラマを彩る!『新潮』連載を単行本化。

『龍の棲心家』(玄有宗久著 文藝春秋)

記憶をさまよう父と暮らす幹夫は、介護のプロ・佳代子と出会う。父の散歩につきあい、大切な誰かを演じ、いっしょに記憶のおもちゃ箱をのぞきこむうち、二人は……。僧侶作家が自由でしなやかな人の絆をあたたく描く。

『言い寄る』(田辺聖子著 講談社)

『お家さん 上下』(玉岡かおる著 新潮社 2007)

大正から昭和の初め、鈴木商店は日本一の年商を上げ、ヨーロッパで一番名の知れた巨大商社だった。その巨船の頂点に座したのは、ひとり女子だった…波乱の運命を生きた明治の女の一代記。激動の時代を描く大河小説。

『天地人 上下』(火坂雅志著 日本放送出版協会)

上杉謙信、直江兼統、真田幸村。激動の戦国乱世に、みずからの不利益を承知で背筋を伸ばし、男をつらぬいた「義」の武將たちがいた。その生き様を、上杉家の知謀の執政・直江兼統を中心に描く。

エッセイ・ノンフィクション

『親鸞を読む』(山折哲雄著 岩波新書)

『人間の関係』(五木寛之著 ポプラ社 2007)

変わる時代に、変わらないものはなにか。「人間」を考えるのではなく、「人間の関係」を考えることこそ重要だ。「生きるヒント」の先にみつけた、他人同士からはじまる「人間の関係」とは。

『養老訓』(養老孟司著 新潮社)

『大人の見識』(阿川弘之著 新潮新書 2007)

『よみからず-絵本からミステリーまで』(飯田治代著

KTC 中央出版 ゆいぼおと発売)

図書館員が選んだ数々の本。読書のヒントに!

『アイヌ神謡集』(知里幸恵編訳 岩波文庫)

『銀のしずく降る降る』(藤本英夫著 新潮社)

19歳でなくなったアイヌの少女のすばらしい作品と評伝です。上記2冊は私の長女から読んでみて、と手渡された本です。ネットで購入したとか。とても深い感動とアイヌ民族を考えると同時に日本を振り返ることになりました。読んでみてください。(西)